

〈無量寿経〉における一念十念

——無著説と世親説による問題の提起——

中 御 門 敬 教

【抄録】

無著は『仏随念註』に、世親は『仏随念広註』と『釈軌論』に仏随念説を説く。「仏随念」とは、いわゆる「念仏」を表わす言葉である。その仏随念説では仏、世尊の一句（略説）には、仏十号中の世尊から天人師に至る九句（広説）の功德が収まることになる。結果、一句の随念でも十句の随念でもその果報は共通する。今回の論文においては、この説を参考にしながら、〈無量寿経〉所説の「一念十念」念仏説について、説一切有部の心王・心所の俱生説を加えて検証した。名号論との関係において、一念とは「仏、世尊」の功德を随念すること（一度の随念）、十念とは「仏十号」の功德を各々随念すること（十度の随念）、ひいては「広説・略説」との理解から一念と十念との同値関係が伺える点を提起した。

キーワード：無量寿経、一念十念、念仏、仏随念、無著世親

1. はじめに

大乘経典の大叢書「大宝積経」の中に、浄土教の根本経典の一つである〈無量寿経〉は所収される。その願往生者に三種の区別を示す三輩段のうち、下輩段に出る「一念」と「十念」が同値される念仏説（一念十念説⁽¹⁾）は、後に浄土教の教理が展開する基点ともなった。この念仏説について、インド仏教の大学匠である無著・世親兄弟（西暦5世紀頃）による、従来は未解明であった「仏随念（Skt.buddhānusmṛti⁽²⁾）」の二著作、すなわち無著著『仏随念註』と世親著『仏随念広註』に、世親著『釈軌論』の仏随念説を加えて、さらに〈俱舍論〉の所説をも参考にして、新たに問題を提起することを本稿の目的とする⁽³⁾。

考察の起点は以下の二点である。すなわち、

- 【1】筆者の理解の及ぶ限り、インド浄土教の立場での「一念十念」念仏説の重要性に反して、我々のそれへの認識や議論の深まりは不充分である。
- 【2】上記『仏随念註』と『仏随念広註』の研究により、インド仏教の基本的な仏随念説について一定の理解に達した。

2. 「一念十念」念仏説への代表的な理解（インド説）

〈無量寿経〉が説く「一念十念」説に関する代表的な指摘として、藤田宏達説、中村元説⁽⁴⁾、荻原雲来説、森二郎説がある。諸氏ともに「一」や「十」を、「きり」や「しめくくり」の良い数として理解する傾向にある。その数の具体性については論じていないといえよう。今ここでは上記の先行研究のうち、〈無量寿経〉念仏説の要約でもあり、「一念十念」説への問題提起にも繋がる藤田宏達説を紹介したい。重要な論点が多く含まれているので、原文のままを示したい。

○藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970、pp. 546-549）

「つぎに、考慮すべき点は、いわゆる十念の問題である。（中略）ただ、注意すべきは、下輩文においては、さらに「一たび心を起こすだけでも」（antaśa ekacittotpādenāpi）（『無量寿経』では「乃至一念」）といわれており、これが「十たび心を起こすことによって」とほとんど同じように用いられていること、しかもともに如来に対する「随念」もしくは「作意⁽⁵⁾」という言葉、すなわち念仏を表わす言葉と併用されているということである。これは、十念の citta の内容が念仏を指すものであり、そのような citta に十とか一とかを言うのが、決して本質的な差別を意味するものではないことを示しているのである。」

○藤田宏達『浄土三部経の研究』（岩波書店、2007、pp. 445-446）

「一と十とは計数の単位であり、ともに数の極限を表したものと言えるから、両者の間には本質的な区別を立てたものとは思われない。古来の伝統的解釈でも、「乃至一念」と「乃至十念」とは同じ意味であるとして、この場合の「乃至」は「念」の回数が定まっていないこと、つまり一念ないし十念（ないし多念）の意と解する。」

3. 〈無量寿経〉諸本における念仏説⁽⁶⁾

〈無量寿経〉では以下の三箇所において、重要な念仏説が確認できる。すなわち、(1) 念仏往生願⁽⁷⁾、(2) 諸仏称揚・念仏往生の願成就文⁽⁸⁾、(3) 下輩段⁽⁹⁾、の箇所である。本稿の「一念十念」説との関係では「(3) 下輩段」が対象となるので、以下にその箇所を確認する。〈無量寿経〉諸本の対応箇所を示せば、以下のとおりである。

○伝支謙訳『大阿弥陀経』（『大正蔵』12、p. 310c）

「当一心念欲往生阿弥陀仏国、昼夜十日不断絶者（辛嶋訳：ひたすら阿弥陀仏国に生まれ

ることを念じ、十日十夜絶えまなく（そのことを思念するならば⁽¹⁰⁾）」

○竺法護訳『平等覺經』

「当一心念欲生無量清淨仏国、昼夜十日不断絶者」（『大正藏』12、p. 292c）

○伝康僧鎧訳『無量寿經』（『大正藏』12、p. 272c）

「十方世界諸天民、其有至心欲生彼国、仮使不能作諸功德、当発無上菩提之心、一向專意乃至十念、念無量寿仏願生其国。若聞深法歡喜心樂不生疑惑、乃至一念念於彼仏。」

○梵文〈無量寿經〉⁽¹¹⁾

「藤田訳：またアーナンダよ、およそ生ける者たちであって、十たび心を起こすことによつてかの如来を随念し（Skt.taṃ tathāgataṃ daśacittotpādāt samanusiṣyanti）、かの仏国土に対して願望を起こし（Skt.sprhāṃ ca tasmin buddhakṣetre utpādayiṣyanti）、もろもろの深遠な法が説かれるときに、満足を得て、ひるむことなく、絶望におちいらず、落胆におちいることなく、たとえ一たび心を起こすだけでも、かの如来を随念し（Skt.'ntaśa ekacittotpādenāpi taṃ tathāgataṃ manasikariṣyanti）、かの仏国土に対して願望を起こすであろうならば（Skt.sprhāṃ cōtpādayiṣyanti tasmin buddhakṣetre）、かれらもまた、夢の中にあつてかのアミターバ如来を見て、極楽世界に生まれ、無上なる正等覺より退転しない者となるであろう⁽¹²⁾。」

ここでは『大阿彌陀經』『平等覺經』⁽¹³⁾の「一心（中略）昼夜十日不断絶」が、魏訳『無量寿經』（香川説：A.D. 421訳經、覺賢・宝雲師弟共訳⁽¹⁴⁾）の時点で念仏の数がより集約された「乃至十念」「乃至一念」となり、現行の梵本へと継承されていく。時代が下るとひたすら念仏する立場から、念数の集約化が進んだ念仏（仏随念）へと読み替えられていく。この仏随念は法随念と僧随念とを伴った、いわゆる「三宝随念」の形で〈阿彌陀經〉にも説かれる⁽¹⁵⁾。

この仏随念は三宝随念の一つとして、初期仏教以来の行法でもある。仏の名号に仏十号の功德がおさまリ、その功德を仏と同値して念ずる。後世の浄土教で議論される、名号論の基点ともいえる立場である。預流果の因となる四預流支（Skt.catvārisrotāpattyaṅgāni）、すなわち

（1）仏への浄信、（2）法への浄信、（3）僧への浄信、（4）聖所愛の戒の第一に相当する⁽¹⁶⁾。

伝統的に、念仏は信心の因であることが理解できる。

次に、梵本と藏訳とに確認できる、重要な表現の相違について確認する。両者は非常に良く一致するので、一貫した読みの相違が理解上の重要な手がかりにもなる。藏訳〈無量寿經〉では、梵本の「十たび」に相当する箇所が、諸版・諸写本共通してすべて「一たび」（Tib.de bzhin gshegs pa de tha na sems bskyed pa gcig tsam rjes su dran par byed cing）である⁽¹⁷⁾。

一方で筆者が確認しえたすべての〈無量寿経〉梵語写本では、この箇所は「十たび」である⁽¹⁸⁾。蔵訳の原拠となった梵文に「一たび」とあったのか、あるいは翻訳作業の段階でインドの親教師ダーナシーラ (Dānaśīla) や、大翻訳師智軍 (Ye shes sde) らが、「一たび」と「十たび」とを同値した可能性もある。ちなみに梵本の「一たび」に対応する箇所は、筆者が確認しえたすべての蔵訳の諸版・諸本共通して「一たび」(Tib.tha na sems bskyed pa gcig tsam de bzhin gshegs pa 'od dpag med de yid la byed de 'dod pa yang bskyed na) であり、〈無量寿経〉梵語写本においても同様である。

4. 〈無量寿経〉への諸部派説の影響

『大阿弥陀経』と『平等覚経』よりも時代が下った魏訳以降の〈無量寿経〉にはより一層、種々の学説が複雑に付加されている⁽¹⁹⁾。教理の記述に精緻さが求められるようになったこともあるし、大乘小乗の兼学化が進んだ反映かもしれない⁽²⁰⁾。例えば『大阿弥陀経』と『平等覚経』には対応箇所が無い、梵本の41頌には、「藤田訳：その三昧の中に住して、菩薩たちは、一刹那の経過の間に、無量・無数・不可思議・無比・無限量の仏・世尊たちを見る (Skt. yatra samādhau sthitvā bodhisattvā ekakṣaṇavyatīhāreṇāprameyāsaṃkhyeyācintyātulyāparimāṇān buddhān bhagavataḥ paśyanti)」⁽²¹⁾とあるが、これは、一刹那に多くの心の現行を認める大衆部説⁽²²⁾を想起させる。これに限らず、説一切有部説の影響も魏訳以降の〈無量寿経〉に確認できる。その具体例を以下に挙げたい。

○成道説の受用

説一切有部の三阿僧祇百劫の菩薩論 (釈迦成道説) は、伝康僧鎧訳『無量寿経』誓願文に新たに受用されている。アビダルマ教理史からは〈俱舍論〉に大きな影響を与えた〈雜阿毘曇心論〉の時代である。受用の結果、有部系論書に説かれた成道の諸条件がどの往生者にも具わり、往生者は誰であれ最終的には阿弥陀仏の誓願成就にあやかって、三阿僧祇百劫の釈迦菩薩行を全うしたことになる。これによって極楽往生の意義付け、行の易行性がより前面に出る⁽²³⁾。

○定業説の受用

〈俱舍論〉「業品」所説の応用が確認できる。以下のとおりである (下線と梵語は筆者付す)。

「藤田訳：おそよいかなる生ける者たちであっても、かの世尊アミターバ如来の名を聞き、聞き終わって、たとえ一たび心を起こすだけでも、淨信にともなわれた深い志向をもって心を起こすならば (Skt.cāntaśa ekacittotpādam apy adhyāśayena prasādasahagatam utpādayanti)、かれらはすべて無上となる正等覚より退転しない状態に安住するからであ

る (Skt.sarve te 'vaivarttikatāyāṃ saṃtiṣṭhante 'nuttarāyāḥ samyaksaṃbodheḥ)。」⁽²⁴⁾

この記述は「諸仏称揚・念仏往生の願成就文」の梵本和訳である。ここに対応する『大阿弥陀経』『平等覚経』の記述はない。『無量寿経』以降に付加される箇所である。ここの下線部分は、〈俱舍論〉「業品」vs. 54-55（定業の説明）を下敷きにしている⁽²⁵⁾。浄信（Skt.prasāda）、志向（Skt.āśaya）を出すから明確に不退転が確定する（定業）。その他、志向と発心とを出す点は、有部系アヴァダーナ「マイトウラ・カンヤカ譚」とも共通する⁽²⁶⁾。逆の例としては、『大阿弥陀経』中輩段・下輩段には、往生への信が確定しなければ疑惑往生（胎生）をもって五百年間、見仏できないとある。

5. 無著・世親説による仏随念説

以下に、従来全容が明らかでなかった無著『仏随念註』、世親『仏随念広註』に出る仏随念説、そして山口益氏による世親『釈軌論』の研究をもとに、無著・世親兄弟の仏随念説を確認する。これら三作は何れも漢訳が存在せず、東アジアの漢字仏教圏には伝播しなかった。先ずは『仏随念註』『仏随念広註』の解題を、佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』（2011）をもとに行う。

○無著著『仏随念註』（Skt.**Buddhānusmṛtivyūṭti*、Tib. *Sangs rgyas rjes su dran pa'i 'grel pa*）

蔵訳にのみ現存する。刊本の所在はデルゲ版東北 No. 3982, mDo 'grel, Ngi.11b5-15a6、北京版大谷 No. 5482, mDo tshogs 'grel pa, Ngi.14a1-18b1である。刊本の奥書刊記は以下のとおりである。

「(D.Ngi,15a6ff.) 軌範師無著がお造りになったものが終わった。インドの和上アジタシュリーパドラと、チベットの翻訳官、比丘であるシャーキャ・ウーが翻訳し、校訂し、確定した。」

解説：仏法僧の三宝随念は数多くの仏典に説かれているが、インドからチベットでは読誦經典として『三宝随念経』が用いられた。この三部の小さな経〈聖仏随念経〉〈聖法随念経〉〈聖僧随念経〉に対して、唯識瑜伽行派の祖師無著は『仏随念註』『法随念註』『僧随念註』を著した。〈聖仏随念経〉は、帰依と信仰の対象としての仏十号すなわち世尊・如来・阿羅漢・正等覺者・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天人師・仏世尊を列挙し、功德を少し説明しているが、本論はその仏十号を解説している。具体的には十号は大功德の観点から諸如来への浄信を生じさせるためのものとされ、第一の「世尊」により共通の仏随念を説き、第二の「如来」により最高の有利利益を行う方便を説くことから諸菩薩と共通しないものとする。第一はさらに、世尊から天人師までの九句により順次、繫縛の断による教主の円満を説くという。最後の「仏世尊」は上記の九句すべてにより諸仏世尊の功德の大性を説くためであるといい、梵語の

文法解釈にも言及する。本論は『法随念註』『僧随念註』とともに、先行文献として、有部のアビダルマ文献である舍利子説『阿毘達磨集異門足論』や大目乾連造『阿毘達磨法蘊足論』の「四預流支に関する四証淨」の所説を承けており、〈俱舍論〉に断片的な説明しか見られない三宝について集中的に議論している。用語、概念についても「諸如来」「諸菩薩」に言及し、種姓については不定種姓、障の断については煩惱障と所知障の断など唯識瑜伽行派特有のものをを用いている。これは唯識瑜伽行派の一般的特徴でもあり、本著を無著の真作と見なすことに矛盾はない。

○世親著『仏随念広註』(Skt.**Buddhānusmṛtiṭīkā*、Tib. *Sangs rgyas rjes su dran pa'i rgya cher 'grel pa*)

蔵訳にのみ現存する。刊本の所在はデルグ版東北 No. 3987, mDo 'grel, Ngi. 55b3-63b5、北京版大谷 No. 5487, mDo tshogs 'grel pa, Ngi. 69a6-79a8である。刊本の奥書刊記は以下のとおりである。

「(D.Ngi,63b4ff.) 軌範師世親がお造りになったものが完了した。」

解説：唯識瑜伽行派の祖師無著の『仏随念註』に関してのみ、その弟、世親が解説し、仏随念(念仏)を論じたのが本著である。世親著『往生論』での阿弥陀仏とその国土への随念は中国、日本の浄土教に大きな影響を与えたが、本論では同著者が三宝や帰依に関して通仏教的な解説を行っていることが注目される。本著は冒頭に、1) 如来の大功德を通じて淨信を起こすための共通の仏随念、2) 永久に有情を利益する方便を説くための諸菩薩特有の仏随念、と二項目を立てている。第一の項目は、仏十号を九句により解説する。ここは説示性と実践性を定義とした教主の円満を解明するという形式であるが、内容そのものは無著著『仏随念註』と類似する。世親著でも〈俱舍論〉になく『釈軌論』の論述と共通する。第二の項目は、〈聖仏随念經〉での功德の叙述を説明するが、ここには五姓各別説、三身説、無住涅槃など唯識瑜伽行派特有の大乘の教義が見られるし、大乘經典〈無尽意所説經〉も引用されている。教理からみて著者が世親であることに矛盾はないが、極楽浄土、阿弥陀仏、往生などへの言及はない。内容的には仏の特性、十号、随念に言及する『瑜伽論』『菩薩地』、『撰大乘論』『彼果智分』等と比較研究が必要である。

次に「一念十念」説への手がかりになる、無著・世親兄弟の仏随念説を挙げる。

○無著著『仏随念註』

「拙訳：(D.Ngi. 14bff.) (P.Ngi. 17bff.) 「仏、世尊」というのを、二回どうして繰り返したのか、というなら、説示した通りの九句すべてによって、諸仏世尊の功德の偉大さがあると説示するために述べた。」⁽²⁷⁾

○世親著『仏随念広註』

「拙訳：(D.Ngi. 58aff.) (P.Ngi. 72bff.) [以上に] 説明したとおりの九句により、述べたいと欲した功德の偉大さを述べ終わってから、〔再び『聖仏随念経』に〕「仏、世尊」というこの二〔句〕も、何のために語ったのかというならば、そこに〔上記のような〕この「功德の偉大さ」がある〔ところの〕ものは、仏・世尊〔こそ〕である、ということを示すからである。」⁽²⁸⁾

○世親著『釈軌論』

「山口訳：その彼は誰であるかといわば、仏・世尊であると説かれる。凡そ覚者である人 (yo buddhāḥ) とかくの如く称揚せられている人 (kīrtitaḥ) である。称揚 (kīrti) と栄光 (bhaga) とは異門であるからである。また別に、要略せる義 (piṇḍārtha) としては、それは、広と略と (vyasta-samasta) で示された功德を讃嘆するのである。広説は九の語句 * によって説く如くであり、略説すれば仏・世尊である。それは、一切の所知を了解するからであり、また一切の悪魔と論敵者を摧破するからである。」⁽²⁹⁾

仏九号の偉大な功德の本体が「仏、世尊」である。「仏、世尊」と一たび随念したら、そこには残る九号の功德も合わせて包摂されることになる。つまり、略説たる一号（仏世尊）には、広説を含めた十号すべての功德が包摂されることになる。こうした説は、いわゆる大乘との関わりも議論される『清浄道論』にも確認できる⁽³⁰⁾。この略説（ウッデーシャ）と広説（ニルデーシャ）の問題については、大竹晋氏による非常に重要な調査結果がある。瑜伽師特有の經典解釈方法であり、世親に先行する瑜伽師の文献に確認できるという。確認される資料として〈解深密経〉や無著『顕揚聖教論』が始まりとされる⁽³¹⁾。筆者が確認した限り、例えば〈俱舍論〉にもある前提を承けて広説される用例も見られるが、略説と広説とを対に出す用例は確認できなかった。

さて上に挙げた世親著『釈軌論』の当該箇所には、「仏名号」に対する広説・略説の説明が出る。これに加えるならば、同著『往生論』の「一法句」「二十九種莊嚴」も、「極樂莊嚴」に対する広説・略説の議論といえよう（Cf. 小谷信千代『世親浄土論の諸問題』、東本願寺、2012）。さらに〈無量寿経〉にも広説・略説に類する表現が出る。概念としては〈無量寿経〉に限らず多くの經典に見られるが、参考までに以下に紹介したい。

○梵文〈無量寿経〉⁽³²⁾

「藤田訳：アーナンダよ、こういうわけで、かの世界は、略して〈極樂〉と呼ばれるのである。詳しく述べたのではない。〔詳しく言うならば〕、アーナンダよ、極樂世界のもろもろの安樂の原因を称讃している間に、一劫も過ぎ去ってしまうであろう。」⁽³³⁾

梵文と蔵訳に出る文章であり、漢訳に対応箇所は無い。梵本には「Skt.vistarena」（略説すると）だけが出る。しかし対応の蔵訳には「Tib.mdor bsdus na」（略説すると）に加えて、藤田訳において「〔詳しく言うならば〕」と補訳された「Tib.rgyas par bstan na」（広説すると）が出る。

○梵文〈無量寿経〉⁽³⁴⁾

「藤田訳：アーナンダよ、かの仏国土における菩薩・大士たちは、略していえば、以上のようである。しかし、詳しくいえば、もし如来（釋尊）が十万・百万・千万劫の間住する寿命の量をもって説示するとしても、これら善き人たちの功德の際限を知ることはい。。」⁽³⁵⁾

梵文と蔵訳に出る文章であり、魏訳『無量寿経』以降の漢訳諸本に対応箇所がある。『大阿弥陀経』『平等覚経』には出ない。魏訳『無量寿経』には「略言」「広説」と出る⁽³⁶⁾。梵本と蔵訳ともに「Skt.saṃkṣiptena, Tib.mdor bsdu na」（略説すると）、「Skt.vistarena, Tib.rgyas par byas na」（広説すると）が出る。

上記の二例とも、いわゆる「二十四願経」（『大阿弥陀経』『平等覚経』）には説かれずに、実際は五世紀初頭に翻訳された魏訳以降の〈無量寿経〉に説かれる点が特徴である。年代からして、瑜伽行派の「広説略説」の影響化の記述と考えることも可能であろう。

6. 心王と心所 一心と念の関係について一

ここでは念仏（仏随念）を、説一切有部説の心所（心作用）の面から考えてみたい。

まずは以下に〈無量寿経〉梵本の下輩段における「一念」と「十念」が出る箇所、すなわち「藤田訳：十たび心を起こすことによってかの如来を随念し（Skt.taṃ tathāgataṃ daśacittotpādāṃ samanūsmaṇiṣyanti）」、「藤田訳：たとえ一たび心を起こすだけでも、かの如来を思念し（Skt.'ntaśa ekacittotpādenāpi taṃ tathāgataṃ manasikariṣyanti）」を、「心を起こす（Skt.cittotpāda）」と「随念（Skt.anu-√smṛ、Tib.rjes su dran pa）」（玄奘訳）作意（Skt.manasi-√kr、Tib.yid la byed pa）」（藤田訳：思念）との関係から確認する。当経は大乗經典なので一見するとこの「心を起こす」が「発菩提心」を連想させ、すると念仏との関わりが問い直されるからである。事実、この前者に相当する魏訳の箇所では、「当発無上菩提之心、一向專意乃至十念」とあるように、訳者は「心を起こす」を「発菩提心」と理解する。しかし、筆者はこの漢訳については一考の余地があると考え。〈無量寿経〉梵本において「発菩提心」を示す場合は、「私は何度も無上なる正等覺に心を起こし、廻し向けています（Skt.punaḥ punar anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau cittam utpādayāmi, pariṇāmayāmi）」

（梵本 5 章）、「他の諸世界における衆生たちが無上なる正等覺に心を起こして（Skt.*ye sattvā anyeṣu lokadhātusv anuttarāyām samyaksaṃbodhau cittam utpādyā*）」（梵本18願）などのように必ず「無上なる正等覺に（Loc.）」の表現が付く。逆に「発菩提心」でない場合の「心を起こす」では、一貫して「無上なる正等覺に」が付かない。一々の用例の場所を示すと、梵本の19願（十たび心を起こす例）、23願（心を起こすやいなや供養の品が出る例）、25願（仏の供養を欲する心を起こすやいなや仏がその者を受け入れる例）、37願（心を起こすやいなや衣服を着たことに気づく例）、45願（心を起こすやいなや欲する説法が聞ける例）、26章（一たび心を起こす例）、37章（心を起こすやいなやあらゆる供養の品が生じる例）において、発菩提心を離れた「心を起こす（Skt.*cittotpāda*）」例が確認できる。何かを望めば即時に生じる場合の「望む」にあたる箇所、Skt.*cittotpāda* を用いている。何れにせよ〈無量寿經〉ではこのように、「心を起こす」と「発菩提心」との使い分けがある。またその他の仏典に確認できる用例として、例えば〈俱舍論〉「業品」にも煩惱を起こす際に「心を起こす（Skt.*cittotpāda*）」例が確認できる⁽³⁷⁾。限定的な調査の段階ではあるが「発心」は「発菩提心」に限らない。この下輩段の記述は「発菩提心」から離れて、改めて問い直す必要がある。

そこで試みとして、先に確認したごとく当經の改編に影響を与えた、説一切有部の学説を参考にして再考したい。特に〈俱舍論〉「根品」に説かれる、「心を起こす（Skt.*cittotpāda*）」と関係する心王と心所との俱生説によってこの点を解釈し、「一念十念」説への問題点を提起する。前提となる心王と心所大地法の理解については、櫻部建氏による研究成果を利用させて頂いた⁽³⁸⁾。以下に基本的な前提を確認する。心王（Skt.*citta*）と共に常に生起するのが心所大地法（Skt.*mahābhūmikāḥ dharmāḥ*）であり、それには十法が有り、受（Skt.*vedanā*）、想（Skt.*saṃjñā*）、思（Skt.*cetanā*）、触（Skt.*sparśa*）、欲（Skt.*chanda*）、慧（Skt.*mati*）、念（Skt.*smṛti*）、作意（Skt.*manaskāra*）、勝解（Skt.*adhimokṣa*）、三摩地（Skt.*samādhi*）である。下輩段の念仏説との関係では、「随念（Skt.*anu-√smṛ*）」と「作意（Skt.*manasi-√kr*）」は共に心所大地法である。この有部説によれば、心王である「心（*citta*）」を起こすと、必ず「念」「作意」は俱生することになる。心と心所とは因果が同時に起こる例であり、相互に因果となり、両者は切り離せない関係である。ちなみにその場合の因が相応因、果が士用果である⁽³⁹⁾。一般的にアビダルマ説では一刹那に一識のみ起こる⁽⁴⁰⁾。〈俱舍論〉「根品」には、「本庄訳：心、意、さらに識は同じ意味をもつ（Skt.*cittam mano 'tha vijñānam ekārtham*）」（AK, ii, 34ab）⁽⁴¹⁾と定義されるので、上記を総合すると、一たび心を起こすと一たび念が起こり、十たび心を起こすと十たび念が起こることになる。大地法の「作意」についても同様である。裏返すと一たび心を起こすことで、同時に仏を十たび随念することは妥当しない。無著・世親の念仏説にあてはめると、十号を随念するにはやはりその数に相応した心を起こすことが必要となる。結局のところ、「十たび心を起こすことによってかの仏を随念する」とは「十回の随念」と同義になり、同時に無著・世親による仏十号随念説と相応する。「一たびの作意」について

も同じである。

7. 小結 ―今後、検証されるべき問題の提起―

無著は『仏随念註』、世親は『仏随念広註』『釈軌論』において九句（仏十号）を広説、一句（仏、世尊）を略説とする。仏、世尊の一句には、仏十号中の世尊から天人師に至る九句の功德が収まるとする。結果、一句の随念でも十句の随念でもその果報は共通する。さらに〈無量寿経〉所説の「一念十念」念仏説について説一切有部の心王・心所の俱生説を加えて、問題点を示し、まとめれば以下のとおりである。

- (1) 仏名号について、瑜伽行派のいわゆる「広説・略説」との親近性がある。
- (2) 〈無量寿経〉下輩段の「仏を、心を起こすことによって随念する」とは、説一切有部の心王・心所（大地法）の俱生起説を前提としたものである。

この二点を糾合すれば、仏名号論との関係において、一念とは「仏、世尊」の功德を随念すること（一度の随念）、十念とは「仏十号」の功德を各々随念すること（十度の随念）、ひいては「広説・略説」との理解から一念と十念との同値関係が伺える。総略の立場から仏号の功德を念じる無著・世親兄弟の念仏説と、極めて類似する。彼らの年代と、魏訳『無量寿経』との間に年代的にも矛盾はない⁽⁴²⁾。

魏訳以降の〈無量寿経〉は、『大阿弥陀経』と『平等覚経』には見られない諸点が補説され、より通仏教的に整備された姿を示している。〈無量寿経〉の漢訳諸本には、三世紀前後の初期のもの、五世紀前後の中期のもの、梵本・蔵訳にほぼ相応する中後期のものが現存している。広く大乘仏典という視点においては、改編の傾向を探る格好の資料である。従来の〈無量寿経〉の分類概念では、魏訳『無量寿経』は、『大阿弥陀経』『平等覚経』と共に「初期無量寿経」に分類されていた（Cf. 註13）。しかし、より厳密には新たに「中期無量寿経」という概念を設けて、改編化の進んだ『無量寿経』をそこに含めることも可能であろう。

註

- (1) 本稿「2. 「一念十念」念仏説への代表的な理解」で紹介した、藤田宏達『原始浄土思想の研究』からの引用箇所を参照のこと。
- (2) Cf. 本庄良文『『俱舍論』七十五法定義集』（『三康文化研究所年報』26・27、1995年、pp. 13-14）「No.19.念（smṛti）smṛtir ālambanāsaṃpramoṣaḥ /（AKBh54, 22）念とは所縁を忘失しないことである。念謂於縁明記不忘。（冠導4, 3b7；大29, 19a20-21）」
唯識説も〈俱舍論〉説と共通した理解である。ただし唯識説（五位百法）には大地法は無く、「念」は別境に含まれる。Cf. 斎藤明編著（代表）『瑜伽行派の五位百法 ―仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集― バウツグコーシャII』山喜房仏書林、2014、pp. 47-49

- (3) さらに検証すべき点も多々あるが、本稿において現時点での筆者の考えを一応整理した。
- (4) 中村元、早島鏡正、紀野一義訳註『浄土三部経』上（岩波文庫、pp. 310-311）に、中村元氏は荻原雲來說、森二郎説をも紹介し、自説を述べる。以下のとおりである。

「十念ということが中国・日本の浄土教では非常に重要な課題となり、善導大師によって「十たび念仏を（口に出して）声で唱えること」という意味に解せられているが、しかし原文によって見る限り、「極楽浄土に生まれたいと願う心を十たび起こすことによってでも」（*daśabhir cittotpāda-parivartah. Tib.sems bskyed paḥi ḥgyur ba bcus*）という意味である。荻原博士は、十念とは、阿弥陀仏に帰命する心を十返発することであると解している（『荻原雲來文集』二六〇―二八四ページ）。口に出して唱えるのではない。「一念」とか「十念」とかいう語が挙げられているのは、一と十とは計数の基であり、小さな数の極限をその単位で示し、十とか一とか言ったのであろう。森二郎氏は十念をインダの基盤において把え、『無量寿経』で十念とは生天の十善をいうと論じている（『印仏研』第四巻第一号、四八ページ以下）。～」

（中村元『東西文化の交流』『選集』第九巻161頁にも同内容があるので、上記は中村元氏の執筆箇所と理解できる。）

- (5) Cf. 本庄前掲論文 p. 14 「No. 20. 作意 (*manaskāra*) *manaskāraś cetasa ābhogaḥ* / (AKBh54, 22) 作意とは心が〔所縁の方に〕向かふことである。作意謂能令心警覺。（冠導 4, 3b8 ; 大29, 19a21）」

唯識説でも〈俱舍論〉説と共通した理解である。ただし唯識説（五位百法）には大地法は無く、「作意」は遍行に含まれる。Cf. 斎藤前掲書〔2014〕pp. 24-26

藤田氏は「十念」の「念」にあたる *Skt.anu-/smṛ* と、「一念」の「念」にあたる *Skt.manasi-/kr* について、ほぼ同義と理解している。なお藤田氏が「思念」と訳す、*Skt.manasi-/kr* (*Tib.yid la byed pa*) は伝統的な玄奘訳では「作意」である。説一切有部説の五位七十五法では、「随念 (*anu-/smṛ*)」と同様に、心所の大地法に分類される。このように区別される両者であるが、〈阿弥陀経〉の「三宝随念」を説く箇所では、両者はほぼ同義に用いられている。以下のとおりである。

【用例 1 *Skt.manasi-/kr*】

○梵文和訳「藤田訳：その声を聞いて、かしこにおけるかの人々には、仏に対する思念が生じ、法に対する思念が生じ、僧団に対する思念が生じる。」Cf. 藤田宏達『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』法蔵館、1975、p. 161

(*Skt.tatra teṣaṃ manuṣyānāṃ taṃ śabdaṃ śrutvā buddhamanasikāra utpadyate dharma-manasikāra utpadyate saṃghamanasikāra utpadyate* / Cf. 藤田宏達『梵文量寿経・梵文阿弥陀経』法蔵館、2011、p. 86)

○蔵訳和訳「河口、宗川訳：そこに生まれた衆生等はその聲を聞いて佛を念ずる心を生じ法を念ずる心を生じ僧を念ずる心を生じる。」Cf. 『浄全』23、1972、p. 347

(*Tib.sems can gang dag der skyas pa de dag gis sgra de thos nas sangs rgyas yid la byed pa skye / chos yid la byed pa skye / dge 'dun yid la byed par skye'o* // Cf. 『浄全』23、1972、p. 348)

○鳩摩羅什訳：其土衆生、聞是音已、皆悉念仏念法念僧。

【用例 2 *Skt.anu-/smṛ*】

○梵文和訳「藤田訳：その音を聞いて、かしこにおけるかの人々には、仏に対する随念が身に起こり、法に対する随念が身に起こり、僧団に対する随念が身に起こる。」Cf. 藤田前掲書〔1975〕p. 162

(Skt.tatra teṣāṃ manuṣyānāṃ taṃ śabdaṃ śrutvā buddhānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhāti dharmānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhāti saṃghānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhāti / Cf. 藤田前掲書〔2011〕p. 87)

○藏訳和訳「河口、宗川訳：そこにその人等はその聲を聞いて佛を憶念し、法を憶念し、僧を憶念することがその身に留るのである。」Cf. 『浄全』23、1972、p. 347

(Tib.der mi de dag gis sgra de thos nas sangs rgyas rjes su dran pa dang / chos rjes su dran pa dang / dge 'dun rjes su dran pa lus la gnas so //」Cf. 『浄全』23、1972、p. 346)

鳩摩羅什訳：聞是音者皆自然生、念仏念法念僧之心。

藏訳〈阿弥陀經〉の河口、宗川訳は「Tib.yid la byed pa (作意)」を「念」と訳し、「Tib.rjes su dran pa」を「随念」と訳す。両氏は藏訳〈無量寿經〉の翻訳では、「Tib.rjes su dran pa」を「〔唯だ一度〕憶念して」、「Tib.yid la byed pa」を「〔唯だ一度、かの無量光如来を〕観じて」と訳す(Cf. 『浄全』23、1972、p. 289)。ここに対応する漢訳『無量寿經』『如来会』は、共に「念」の訳語を当てる。

- (6) インド浄土教との関係で、念仏説を論じた代表的な研究に以下がある。藤田宏達『原始浄土思想の研究』(岩波書店、1970、pp. 537-565)、望月信亨『浄土教の起源及発達』(山喜房仏書林、1972、pp. 763-793)、櫻部建「念仏と三昧」(『奥田慈應先生喜寿記念仏教思想論集』、春秋社、1976) * 櫻部建『増補佛教語の研究』、文栄堂、1997に再録)、氏家覚勝『陀羅尼思想の研究』(東方出版、1987)、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』(山喜房仏書林、1993、pp. 235-261)、平岡聡「大乘仏教における〈念仏〉の再解釈 一念の対象となる「仏」の内容の変遷から見て」(『福原隆善先生古稀記念論集 仏法僧論集』、山喜房仏書林、2013)。最近の情報として研究代表者：名古屋大学 畝部俊也氏による「基盤研究(C) タイの装飾写本等に基づくパーリ語蔵外仏典の研究」において、タイ写本に出る「マハーグナ」と呼ばれる仏随念典籍の研究が進展している。
 - (7) Cf. 香川孝雄『無量寿經の諸本対照研究』永田文昌堂、1984、pp. 120-121。同本 pp. 40-42の「諸本構文対照表」の小見出しを以下、利用した。代表として魏訳の対応箇所を示せば、伝康僧鑑訳『仏説無量寿經』(『大正蔵』12、No.360、p. 268a)である。
 - (8) Cf. 香川前掲書〔1984〕pp. 246-247。魏訳の対応箇所を示せば、伝康僧鑑訳『仏説無量寿經』(『大正蔵』12、No.360、p. 272b)である。
 - (9) Cf. 香川前掲書〔1984〕pp. 252-253。魏訳の対応箇所を示せば、伝康僧鑑訳『仏説無量寿經』(『大正蔵』12、No.360、p. 272c)である。
 - (10) Cf. 辛嶋静志「『大阿弥陀經』訳註(六)」(『佛教大学総合研究所紀要』12、2005、p. 14)
 - (11) Cf. 藤田前掲書〔2011〕p. 49
 - (12) Cf. 藤田前掲書〔1975〕p. 110
 - (13) 〈無量寿經〉には漢訳五存、すなわち『大阿弥陀經』(二十四願)、『平等覺經』(二十四願)、『無量寿經』(四十八願)、『如来会』(四十八願)、『莊嚴經』(三十六願)と、梵本(四十七願)、藏訳(四十九願)の合計七種の異本が存在する。これらは「初期無量寿經」(『大阿弥陀經』『平等覺經』)と「後期無量寿經」(それら以外)とに分類される。もしくは願文の数を参考にして、「二十四願經」(『大阿弥陀經』『平等覺經』)、「四十八願經」(『無量寿經』、梵本、藏訳)、「三十六願經」(『莊嚴經』)とも言われる。Cf. 藤田前掲書〔1970〕pp. 167-171、香川前掲書〔1993〕p. 278ff.
 - (14) Cf. 香川前掲書〔1984〕pp. 27-30、藤田前掲書〔1970〕pp. 69-75、p. 75註(1)
- 香川氏は仏陀跋陀羅・宝雲の師弟による共訳説をとる。永初二年(421.A.D.)建業の道場寺にて訳出されたと紹介。この説の淵源としては、僧祐『出三蔵記集』卷二の「新集經論録」に

出る仏陀跋陀羅と宝雲の項を挙げる。藤田宏達氏もこの立場であり、境野黄洋、望月信亨、小野玄妙、常盤大定、塚本善隆、津田左右吉、大野法道、結城令聞、鈴木宗忠らの諸氏によっても容認された説である。

- (15) Cf. 註(5)
- (16) Cf. 本庄良文『梵文和訳決定義経・註』（京都、1989、pp. 124ff.）、拙稿「世親作『仏随念広註』和訳研究 ―前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏観―」（『佛教大学総合研究所紀要』15、2008、pp. 106-108）
- (17) トクパレス写本、デルゲ版、ラサ版、シェルカル写本、ナルタン版、ブダク写本、北京版、ウルガ版を利用した、佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編『蔵訳無量寿経異本校合表（稿本）』（1999、p. 150）を参照した。
- (18) Cf. 藤田宏達『梵文無量寿経写本ローマ字本集成下巻』（山喜房仏書林、1993、p. 951, 955）、同『梵文無量寿経写本ローマ字本集成補巻』（山喜房仏書林、1996、pp. 313-314）
- (19) 大乘仏典のこうした特徴を指摘したものに、平川彰『初期大乘仏教の研究Ⅰ』（「平川彰著作集」第3巻、春秋社、1992、pp. 10-24）、本庄良文「アビダルマ仏教と大乘仏教 ―仏説論を中心に―」（『大乘仏教の誕生』（「シリーズ大乘仏教」2）、春秋社、2011、pp. 176-177）がある。
- (20) 七世紀に著された義浄『南海寄帰内法伝』、玄奘『大唐西域記』からは、大乘小乗の仏教が混在し、種々の立場の仏教者がいわば「共住」していた様子が推測できる。近年、インド仏教圏における正量部を中心とした、こうした仏教部派の動向を整理したものに、並川孝儀『インド仏教教団正量部の研究』（大蔵出版、2011、pp. 50-56）がある。なお〈無量寿経〉魏訳と同年代、つまり両書に先行する五世紀の『法顕伝』にも、部派の伝播状況がある程度確認できる。試みにそこに記載される国名・地域名と、その地での仏教の状況を登場順に挙げれば以下のとおりである。

- ・長安〜中央アジア：鄯善国（小乗学）、于闐国（大乘学）、子合国（大乘学）、羯叉国（小乗学）
- ・北インド：阇歴（小乗学）、懸度（大乘流伝の弥勒菩薩像）
- ・西北インド：烏菟国（小乗学）、毗荼国（大乘小乗兼学）
- ・中インド：摩頭羅国（大乘小乗）、罽𑖇城（小乗学）、摩竭国（大乘小乗）、拘𑖇弥国（小乗学）、巴連弗邑（大乘、大衆部、説一切有部）

このうちの具体例として中インドの摩頭羅国の状況を挙げれば、以下のとおりである。

「（長澤訳）アショーク王塔の付近に摩訶衍僧伽藍が造られ、はなはだ美〈嚴麗〉し。また小乗の寺もあり、ここにあわせて六、七百人の衆僧がいる。〔衆僧たちの〕威儀秩序は観るべきものがある。四方の高徳の沙門や学問の人で、〔仏法の〕奥義、学理を求めようと欲する人は、みなこの寺に来る。」

Cf. 長澤和俊訳註『法顕伝・宋雲行紀』（「東洋文庫」194、平凡社、1993）

上記の原文は以下のとおりである。

「於阿育王塔辺造摩訶衍僧伽藍尽嚴麗。亦有小乗寺。都合六七百僧衆威儀庠序可觀。四方高徳沙門及学問人、欲求義利皆詣此寺」（『大正藏』51, No. 2085, p. 862b、長澤前掲書 p. 97）
インド仏教圏では全体的には小乗学の趨勢も強い。しかし中インド（釈迦が活躍した地域）においては大乘小乗の並立状況が確認できる。

- (21) Cf. 藤田前掲書〔1975〕p. 70、藤田前掲書〔2011〕p. 24
- (22) Cf. 川崎信定『一切智思想の研究』春秋社、1992、pp. 83-99
- (23) Cf. 拙稿「〈無量寿経〉誓願文と釈迦の菩薩行 ―説一切有部説の痕跡―」（『印仏研』58-1、2009）、同「伝ディグナーガ著〈普賢行願讃釈〉に説かれた極樂往生と釈迦菩薩行 ―還相廻向

の前提—」(『印仏研』61-2、2013)

- (24) Cf. 藤田前掲書〔1975〕p. 108
- (25) 良忠『選訳伝弘決疑鈔』(『浄全』7、p. 254)にも〈俱舎論〉「業品」v. 54が下敷きになっている。厳密には唐門暉述『俱舎論頌疏』(『大正蔵』41、No.1823、p. 950a)からの引用である。良忠は、「本来、心の状態と、行為の継続性によって果報が確定するのだから、称念についてもその両者はあてはまる」と解釈し、その根拠としてv. 54を出す。Cf. 拙稿「法然上人による観念 —観念と智慧との浅深—」(『佛教大学仏教学部論集』95、2011、pp. 38-39)。
- (26) Cf. 拙稿「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究(5)」(『浄土宗学研究』37、2011、pp. 95-97)
- (27) Cf. 拙稿「無着作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」(『佛教大学総合研究所紀要』17、2010、p. 78)
- (28) Cf. 拙稿「世親作『仏随念広註』和訳研究」(『佛教大学総合研究所紀要』15、2008、p. 125)
- (29) Cf. 李鍾徹『世親釈軌論』チベット語訳校訂テキスト』山喜房仏書林、2001、p. 36
Cf. 山口益「世親の釈軌論について —かりそめな解題というほどのもの—」(『山口益仏教学文集』下、春秋社、1973、pp. 179-181))
山口氏は徳慧註によって、九の語句として、「世尊・如来・応供・正等覚・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師」を註記で示す。
- (30) Cf. 藤田宏達「仏の称号 —十号論—」(『玉城康四郎博士還暦記念論集 仏の研究』春秋社、1977、p. 91)
『清浄道論』でも、十号に相当する称号を仏・世尊の「諸徳」(guṇā)と呼んでいただけれども、十号という名称を用いなかった(中略)」
- (31) Cf. 大竹晋校註『十地経論』(『新国訳大蔵経釈経論部』16、大蔵出版、2005、pp. 356-357)
- (32) Cf. 藤田前掲書〔2011〕p. 42, 45
- (33) Cf. 藤田前掲書〔1975〕p. 100, 106 p. 100では「詳しく言うならば」、p. 106では「詳しく説くならば」とある。
- (34) Cf. 藤田前掲書〔2011〕p. 64
- (35) Cf. 藤田前掲書〔1975〕p. 128
- (36) ○伝康僧鑑訳『無量寿経』(『大正蔵』12、p. 274b)
「阿難、彼諸菩薩。成就如是無量功德。我但為汝略言之耳。若広説者、百千万劫不能窮尽」
- (37) 「舟橋訳：けれども貪欲等は加行としてはふさわしくない。何となれば、僅かに心が起こっただけで加行が為されたことにはならないからである (Skt.na tvabhidhyādayaḥ prayogā yujyante / nahi cittotpādamātreṇa prayukto bhavati /)」
(Cf. 【和訳】舟橋一哉『俱舎論の原典解明』法蔵館、1987、p. 318=【梵本】P.Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, 1975, Patna, p. 240=【漢訳】玄奘訳『阿毘達磨俱舎論』(『大正蔵』29、No.1558、p. 85b))
- (38) Cf. 櫻部建『俱舎論の研究 界・根品』(法蔵館、1979、pp. 281-283)
「(1.心所法の分類)(中略)ここに大地〔法〕(大きな地をもつ法)とは、その地〔すなわち生起する範囲〕が大きい〔法〕ということであって、〔つまり〕あらゆる心の中にある(あらゆる心に伴って生起する)〔心所〕である。
(2.大地法)では、あらゆる心においてある〔心所〕とは何か。
受と思と想と欲と触と慧と念と作意と勝解と三昧とはあらゆる心において〔ある〕。(二・二四)
これら十法はあらゆる心刹那においてあまねく存在する。(中略)」

（Cf. 荻原雲来、山口益訳註『和訳称友俱舍論疏（二）』（梵文俱舍論疏刊行会、1934、pp. 56-59）

Cf. 櫻部建、上山春平『存在の分析〈アビダルマ〉』（角川文庫ソフィア、1996、pp. 109-110）

「心と心作用との「俱生」

さて、心が生起するときは、かならず心作用とあい伴う。（中略）すなわち「大地法」と呼ばれる十種類の心作用はいつの場合にも心と“俱生”（ともに生起する）しており、さらにたいていの場合にはなお数種あるいは十種類の心作用が同様に“俱生”していて（中略）」

(39) 櫻部建、上山春平『存在の分析〈アビダルマ〉』（角川文庫ソフィア、1996、p. 79）

(40) Cf. 西義雄『阿毘達磨仏教の研究』（国書刊行会、1975、p. 321ff. 「大衆部系の「般若」とその認知作用」）、川崎前掲書〔1992〕pp. 89-99

(41) Cf. 本庄前掲論文〔1995〕p. 12

(42) 世親年代：宇井説400-480、加藤説350-430。Cf. 加藤純章『経量部の研究』春秋社、1989、pp. 58ff.

〔付記〕

本稿は、「法然仏教の多角的研究」班の月例発表会（佛教大学、2013）において発表した「北伝系仏典にみる仏随念 —『無量寿経』における一念十念の問題—」に基づく。発表時には本庄良文氏、伊藤真宏氏、齊藤隆信氏、曾和義宏氏から御教示を頂いた。また「「仏随念」関連文献ワークショップ」（名古屋大学、2013）においては、和田壽弘氏、畛部俊也氏から、無著によるパーニニ文法を前提とした言語学的な「Buddha」理解を始め、種々の御教示を頂いた。さらに平成26年度浄土宗総合学術大会（佛教大学）においては、小澤憲珠氏から、五世紀前後のインドにおける大乘説と小乗説との混在について、大乘者と小乗者との「共住」という視点を御教示頂いた。執筆時には藤仲孝司氏、古角武睦氏から種々の御教示を頂いた。謹んで諸氏に感謝致します。

（なかみかど けいきょう 嘱託研究員、知恩院浄土宗学研究所研究員）